

「学力向上対策管見」の執筆についての覚書



元新潟市立浜浦小学校長
羽 二 生 恵 太 郎

2008・8・3 書きはじめ

1 はじめに

新潟教育研究所から所報の巻頭文を書いてくれとの依頼がありました。老齢をも顧みず快く引き受け、暇にまかせていろいろ考えてみて、「学力向上」についての対策を提案しようと考えました。「学力向上」については、新潟市立万代小学校における5年間の研究の実績があるし、このときの経験をもとにしてかねがね抱いていた意見をまとめようと計画しました。

この万代小学校における経験から、多数の集団で5%の成績をアップすることがいかに容易ならざることかということ、成績アップ＝学力向上の最大のきめ手は、「教職員の人間関係、協力態勢の向上」であることを中心に書こうと計画しました。さらに、私が新卒で万代校に赴任し、短期現役兵を終えて9月に着任し、11月の全校音楽会で、5年生を代表して私の学級が「故郷」と「秋」という唱歌を私のピアノ伴奏で歌ったときの苦労話＝教師の熱意・ファイトが子どもに大きなインパクトを与えるものであることを述べたいと思いました。そして更に、東京都の指導主事の森さんから聞いた算数のテスト成績がとびぬけてよかった学級のかなり年配の女性教師の指導ぶり＝子どもの主体的な取組がいかに大切であるかを述べたいと考えました。

その後、前記の原稿を書き上げた時点で、あの頃は本県と同じレベルか、失礼であるが少し下のレベルであった青森、秋田、山形の各県の最近のすばらしい躍進ぶりを見て、全県の課題とし組織的な態勢づくりをしなければ新潟県全体の学力のレベルアップは難しいぞという警告も書き加えたいと思ったのであります。

こんなことから、次のような項目を立ててみようと思いました。

(1) 5%の壁

大きな集団でテストの成績を5%アップすることは、とても難しいことである。

(2) 失敗例の中にこそ指導のポイントがある

失敗を恥ずかしがり、成績のよくないことを他人に隠そうとする傾向が一掃され、他人の指導助言、協力を喜んで受け入れるムードができたなら、急に成果が上がってきたこと。

(3) 教師の学力向上に取り組む熱意が子どもに大きな影響を与える

私の下手な音楽指導にもかかわらず、わたしの無我夢中の努力で全校音楽会の出演がうまくいき、子どもたちが音楽の授業をたいへん好むようになった。能力の劣る私のガムシャラな努力が子どもの心をゆさぶることができた。

教師の学力向上への取り組む姿勢が子どもに反映する。子どもにインパクトを与える。

(4) 子どもの自主的・主体的な取り組みの姿勢を育て上げる

「学力向上」は、一般的に教師が強引に引っ張ることになりやすい。子どもの意欲を盛り上げ、やる気を喚起し、子どもたちがよく考え、創意工夫をしていけるような力を養わなければならない。成功を急ぐあまり、教師中心で押し進めては効果がない。

この4項目で書いてみようと構想しました。

それで、規定の字数、22字×30行×2枚の原稿用紙を用意して書き始めたところ、書きたいと思ったことの1/5か1/10ぐらいしか書けません。とても4項全部について書けるはずもないことがわかり、はじめの(1)と(2)の項目についてだけ述べることにしました。それでも紙面が不足で、文章を舌足らずにしてもこの字数で済まそう、具体例を挙げたいところも抽象的な言葉で済ますといった工夫をしてやっと指定の字数にまとめました。(3)と(4)の項目も重要なファクターとして考えていたので、3行で項目だけを書きとめてやっと納めました。

内容はともかくとして、一応要求されたスペースに納めることができたので、これを送付することにしました。そして、「学力向上対策管見」という題をつけましたが、今の若い人は「管見」といった言葉にはなじみがないと思い、「筆者注」として「狭い見識にもとづいての意見」という意味である旨附記させてもらいました。本人としては、自分の体験にもとづくオリジナルな意見であるという自負はありますが、日本人的謙譲の美德のつもりで、あえて管見としました。

以上のようないきさつで、あの原稿を仕上げました。仕上げてみて、せっかく「ない知恵」を絞り出して考えたことを文字に具体化しておこうと思いつきました。新潟教育研究所から依頼があったために、しばらくの期間、脳をフル回転させ、血流をよく活性化することができました。それを記念するためにも、この論文を書くにあたって考えたこと、頭によみがえってきたことなどを書きとめておきたいと思ったのです。私も90才、残りの人生は時間の単位で測れるぐらいになったわけですので、あの時あんなことを考えていたのかと思い起こしてもらえるようにしてやろうと考えまし

た。それで、「あの論文を書く裏でこんなことを考えていたのか」と思い出してもらいたいと思って走り書きをはじめたのです。

したがって文章も粗雑、文字の使用の間違いもあると思いますが、そのことは寛恕していただきたいと思います。

なお、あの論文も、そしてこの雑文も一切資料を調べ直すことなく私の頭の中に残っているものだけで書いています。ですから、少しくらいのミスは見のがしてお読みいただきたいと思います。

(1) 5%の壁

戦後の教育は、墨塗り教科書ではじまりました。国民学校教科書の国家主義、神道主義といった箇所を墨でまっ黒に塗りつぶして使ってよいことになり、学校ではまず全児童に教科書の何ページのどの箇所を墨で塗れという仕事からはじめました。塗り忘れの箇所が見つかって校長が罰を受けたりしたことがありました。次の年は、墨を塗った箇所を除いた新聞紙を折りたたんだような教科書が配給になったりしましたが、もう指導がすんでから届いたり、あてになりませんでした。

私は、附属小に勤務していて、全学年用として計算練習帳を作りました。1年から6年までの計算練習問題をまとめたものです。附属小の生徒のために印刷したものでしたが、これが他の学校にもずいぶん売れました。

しかし、これは1・2年生には使い切れません。それで、1年生用、2年生用の教科書(上・下巻)4冊を作りました。「かずのおくにへ」というシャレた題をつけ、さし絵をたくさん入れたいい本でした。私が、CIAの図書館に通ってアメリカの教科書を参考にして原稿を書き、田中卓美君(故人)にさし絵を頼みました。とても立派な教科書になり、附属小学校以外の学校にもたくさん売れました。三条の野島書店からの出版でした。とてもうまくいったので、野島書店の方(のちに社長になった方)は全国向けに算数教科書として出版を真剣に考えたようですが、私たちはとてもそんな大袈裟なこととは尻込みしました。

この頃、学習指導要領というものが文部省から発表され、それにもとづいて各学校が教育課程を編成して指導するというやり方が始まりました。ところが、学習指導要領では国語、算数は30%、理科、社会は20%とかといった割合で指導時数を決めればよいといった状態でした。

昭和30年頃、文部省が各学校の指導計画上の各教科の指導時数を調べたところ、6年生の算数の指導時間は1週間に3時間という学校から6時間指導している学校があるという状態で、これでは大変だということで、昭和35年頃だと思いますが、全国一律に教科毎の指導時数が決められ、年間35週実施ということで年間の指導時数が定められたのであります。しかもこの指導時数は最低限のものであるとされました。

戦後、GHQの指導で、国家はできるだけ枠をはめないでそれぞれの学校の自主性を重視するという方針でありました。学習指導要領もわざわざ表紙に「試案」と表示されており、国家の統制をできるだけ排除しようというムードがありました。このため、学力の低下が問題となったのであります。

たしか昭和25年頃、第1回の全国学力検査が行われたと思います。その後も行われ、全国各県の順位を調べて発表する出版社も現れ（文部省は順位などは発表はしない）、各県間の競争になったり各学校間の競争になったりしました。このため、テスト当日は校庭のポールにZ旗を掲げて全員にハッパをかけたり、できの悪い子を当日休ませるといったようなこともあったとのことでした。

また、全国学力検査結果は思わぬところに大きな影響を及ぼしていました。この頃は、大工場が地方に分散される頃でした。学力の低い地方への進出を社員は拒否するようになったのです。したがって、学力向上は工場誘致の第一要件になったのです。

このように昭和30年代は、学力向上は学校教育の最大の課題となったのであります。そうすると教職員組合はだまっています。所謂「学テ闘争」がはげしくなったのであります。「学テ反対」闘争や組合幹部と教育委員会との交渉なるものが度々行われ、果てはテスト実施の拒否、ストライキといったことも行われたのであります。

私事ですが、私は県の指導主事を務めており、直接担当の係ではないのですが、交渉の場に動員され、はげしいやりとりの様子を体験しました。

このような背景の中での本県のテスト結果は、全国平均のおよそ5%も下回っていたのです。したがって、このことは政治問題にもかかわってきました。県議会の質問にも「本県の児童生徒の学力調査の結果は全国平均を下回っているが、これはなぜか。これに対する対策は。」ということが出てきます。時の知事さんは「本県は僻地小規模校が多いこと、豊かな農業県で無理に高校・大学等へ進学する必要がないこと」などをあげて説明していました。

ところが、私の県指導主事時代、「ほんとうに僻地校の成績はよくないのか」ということを調べるため、予告なしに抽出校であった学校の実状を調査に行きました。僻地校はかえって成績がよかったです。その理由は、訪問してみてわかりました。子どもたちはもう7時半頃には学校へ来ています（親は野山に出かけるので子どもも一緒に学校へ）。宿直の先生は、これらの子どもを教室に入れ、国語や算数の練習をさせるのです。このようにして毎日1時間ぐらい余分に練習などができるのです。では、一体どの学校が本県の学力の低下の原因を作っているのかということが問題になります。このことについては軽々に表現することはできません。

学力低下の問題は、高校進学率、大学進学率や有名大学への合格者数にも反映してきます。本県はそのどれもが低迷し、全国的順位がいつも中位以下となっていたように思います。

学力調査の成績の順位は、たしか内外通信社というところが、各県の結果を調べて表にして発表していました。また、有名大学への合格者氏名、人数等は週刊誌の特集となって発表されていました。最近は、このような競争をあおるようなこと、プライバシーに関することは発表を控えるようになっていきます。

昭和50年代、私は学習研究社の顧問をしていましたので、いろいろな週刊誌や新聞などを資料にして、近県、首都圏等の有名高校の有名大学への合格者数の表を作り、本県の進学校の状況と比較していろいろ考察をしてみました。

この時、富山県には富山、富山中央、高岡高校という3つの飛び抜けた進学校があり、一つの学校の有名大学合格者数は本県全体の合格者数の合計より多いような状況を見てびっくりしたものです。面積は本県の1/3、人口はおよそ1/2。それなのに有名大学への合格者がこんなに多いわけは、としみじみ考えざるを得ませんでした。これらの学生たちは、30年後の今頃は全国各地で、また地元富山県で大活躍をしていることでしょう。小・中学校の児童生徒の学力の差が、県の勢いを盛り上げる原動力になっているものと思うのであります。

このような意味から、児童生徒の学力向上という課題を考えてみなければならないと思うのです。

(2) 失敗例の中にこそ指導のポイントが

私は、昭和28年1月1日付で、新潟市教育委員会の指導主事に任命されました。この年の4月、新潟市立万代小学校は、私と組んで、算数の学力向上対策を5か年継続で研究してみようと計画してくれました。市町村教育委員会は発足したばかりで、まだ十分に組織化されておらず、若造の私は、さっさと知り合いの校長さんや職員の方といっしょにこの研究に没頭したのです。校長室の隣の小さな部屋の一隅に私用の机を備えてくれ、暇さえあればここへ通って先生方と話し合いをしました。

本文にも述べたように、学力向上のために指導時数を増やしたり、放課後におくれている子どもを残して特別に指導するといったこともせず、平常の学校運営の中で、1時間毎の指導を充実させて、学力調査の成績が全国平均より10%以上うまわる成績を獲得できるようにしようと試みたのであります。

毎週金曜日の放課後に学年会を設け、各学年毎に算数科の指導計画、指導法の工夫などを話し合ったり、指導結果を報告し合ったりしました。また、全校的に研究授業を提供し合ったりして、いろいろな指導法を工夫したりしました。しかし、初めの1、2年は目に見えるような効果は挙がりませんでした。

ところが、3年目あたりから急に効果が出始めたのです。それは、初めの頃、自分の担任する学級の成績の悪さを他の人に知られたくないという気持ちがたいへん強かったように思いました。また、指導がうまくいき、共通のテストでいい成績を収めている人も、自分の指導がうまくいったわけを説明したり、こうしたらどうかと提案し

たりすることは「いばっている」「自慢をしている」等と思われることを警戒して積極的に提案しようとしないうという傾向があり、せっかく毎週打ち合わせをしながら、知恵の出し合い、助け合いという協力態勢がうまくできなかったためと思います。

この傾向が一掃されはじめたのが、「失敗例を隠さないで明確に示し、みんなの知恵と協力をお願いするというムードができた」からと思います。老練な学年主任が、ザックバランに「いやー、しくじったぜ。この問題、うちの学級は半分も間違ってしまったぜ。どこの指導が悪かったのかなあ。」と切り出すと、「実は私の学級もよくなかった。」といった話が出、これに対して「私はこの教具を使ったらよかったみたいだ。これを使ってみたら。」と言って、使った教具を示したりするようになったのです。「それはありがたい。早速明日はこれを使ってやりなおしてみよう。」また、「私はこんなプリントを作って練習させたら、子どもたちの理解が深まったようです。」といった提案があったりし、それをみんなで活用するといったムードができてきました。このような傾向はどの学年でも一様にはじまり、学年の打合せ会を待つまでもなく授業の進行中、いつでも、どこでもメンバーの協力関係が深まり、学年全体の学習の深化が図られたのであります。

このようなことから、研究開始の3年目頃から急に成果が挙がったのであります。

最近、会社の経営やプロジェクトの遂行等でも「失敗例」を大切にし、失敗例の中から失敗の原因や成功への秘訣を探求しようとする傾向が急に増加しているようです。科学の大発展は、失敗した実験例を詳細に記録することからヒントを得たという例はいくらでもありましよう。ところが、一般的には、予想した結果が出ないと、それは実施している人の能力や技術のまずさや装置や材料の質の問題とされ、失敗例は恥ずかしいものとされ、隠したり廃棄されたりしてしまうのであります。最近、このことがあらゆる分野で反省され、失敗例から何を学びとるべきかという学問までできたと聞いています。

教育の分野でも、「荒れる学校」「成績の良くない学級」「仲よく協力できない学級」等の所謂「問題学級」がたくさん出現しているようですが、これらの解決にも「それは担任の指導力の問題だ」とかたづけしないで、その原因を追及するようなことが重視されなければならないと思うのです。こんな意味からも、学校における学習指導充実のポイントは、成績不振を隠さず、みんなが助け合って解決しようとする「メンバーの協力関係の深化」にあると思っていますのであります。

(3) 担任する教師の熱意、意気込みが児童生徒に大きなインパクト (impact) を与える

万代小学校における5年間の研究が大きな成果を挙げることができた原因の一つとして、この研究は教職員の自主的な取り組みであったということでありま。そもそもこの研究は、市教委から委託されたものでもなく、校長さんの提案でもないのです。

戦後まだ間もない頃であり、経済的にも不如意な家庭も多く（万代橋の下等の空き地に一町内分ぐらいのバラックがあったりした）、児童数はどんどん増加し、その生徒指導には手を焼いていました。そこで、先生方は、「学習に興味を持たせ、希望を持って明るい学校生活を送れるようにできないか」と考えた結果、「算数の学力向上」をとりあえずの研究テーマとしてがんばってみようというように意見がまとまり、ついでには「新しく指導主事になった羽二生を活用してみよう」ということになったのであります。

ですから、研究を始めて1、2年ぐらいたって成果があまり挙がらない頃でも、自分たちで計画したことだからもっとがんばろうという気持ちが持続したのだと思います。3年目あたりから先に述べたように著しい成果が見えはじめると、さらに意欲が高まり、4年目、5年目とすばらしい成果となったものと思います。

私事で大変失礼ですが、私にも似たような経験があります。

私は、昭和13年3月に師範学校を卒業すると、「新潟市立万代尋常小学校訓導」を命ぜられたのです。その頃は、師範学校卒業生は「短期現役兵」として入隊し、5ヶ月間兵役に従事すると、第二国民兵となり、一般のような兵役を免除されるという制度がありました（国民の義務教育充実のため）。したがって、私は8月31日付けで除隊し、9月1日に万代小学校に赴任したのであります。

担任は、5年生の女子組でありました。この頃は、「全教科担任主義」といって、全教科を学級担任が受け持つことが主流でありました。「裁縫」という教科だけは専任の女の先生が担当し、あとは全部私が教えるのです。在学中、私はテニスの選手で、明るい中は練習に明け暮れしており、「オルガン教本」などサボってばかりいました。ましてピアノを弾くなど、恥かしくて練習もできませんでした。

ところが、9月に赴任し、11月に全校音楽会があります。各学年から1学級ずつ出演しなければなりません。学年主任から「若けえの、君ががんばってくれたまえ」と言われてしまいました。5年生は4学級。どの先生も男子で音楽を指導できる人はいないので。若気の至り、「私はピアノもよう弾けません。かんべんしてください」とは言えないのです。しかたなく「やるしかない」ことになりました。当時、教職になれた女の先生たちは、右手でメロディーを弾き、左手は適当な和音を作って伴奏していました。私には、そのような器用な真似はできません。そうかといってメロディーだけを単音で弾いて伴奏するということはとても恥ずかしいことで、5年生担任全体が笑いものにされてしまいます。さあ、大変です。教師用教本にある正式の伴奏をしなければならぬのです。まさに泣きたくなるような大事件です。在学中、サボっていたつけが一挙に襲いかかってきたのであります。

日数はあと2カ月。歌は「故郷」と「秋」という2曲です。私は譜面を見てどの鍵盤を弾けばよいのかということがパッと読み取れないのです。それで、1つ1つの音

符をドレミファ……と五線紙上で数えながら調べて鍵を決めるのです。

まず、右手だけの鍵を弾けるようにします。4小節（1段目）だけ何遍も練習するのです。一種の反射運動にするわけです。こんな練習の音を他の職員に聞かせるのは大変恥ずかしいので、全職員が帰ってから音楽室に籠もりました。幸いにも独身でしたので、しょっちゅう宿直をさせられました。この日は所定の見廻りをすますと、懐中電灯で鍵盤を照らしながら存分に練習します（この頃は音楽室に電灯などついていません）。右手の動きだけを反射運動にするにはおよそ1週間かかります。今度は、左手の動きを反射運動にまでするのです。これにまた1週間ほどかかります。そうして、次は両手の動きを反射運動にまで仕上げるのです。これにまた1週間はかかります。このようにして1段目の4小節の伴奏を仕上げます。

有り難いことに、どの曲も同じリズムで似たような音が繰り返します。ですから、2段目の4小節は割合楽にできるようになりました。「故郷」という曲はリズムカルな心地よい曲で案外早く身に付きました。ところが、「秋」という曲は、「とんぼ飛び交うのどけき日和…」といった名文句で始まるのですが、右手も左手も鍵を3つずつ弾かなければなりません。これを覚えるのは大変でした。「何でこんな曲を歌うように決めたのか」と悔やみました。しかし、時すでに遅し。本当に泣きたい気持ちでした。乗りかけた船だ、がんばるしかないと決意しがんばりました。

やっと2曲ともまがりなりに奏でられるようになりました。ところが、いざ子どもの歌と合わせてみると、私がときどきミスタッチをしたり、とぎれたりすると、子どもたちはパタッと歌うのをやめます。音楽会の当日、こうなったら大変です。「どうか先生が間違っても元気に歌ってくれ」と頼み、その練習を一生懸命にしました。

このような必死の取り組みで音楽会当日を迎えました。ところが、天祐神助のお陰が、当日はじめて私の伴奏がスムーズに流れ、子どもたちは大変気持ちよく歌い終わったのであります。「タン、ターン、タン」とお辞儀の曲を弾き終わった時、思わず「やったあ」と叫びました。子どもたちも一斉に飛び上がって喜びました。

当日音楽会終了後、恒例の慰労会がありました。音楽会の実施責任者の音楽主任は「今年はみんな正式の伴奏で歌わせてくれた。近年にないりっぱな音楽会だった」と心から感謝する辞が述べられました。第5学年の代表として責任を果たしてホッとしました。そして酒を酌み交わしているとき、ある先輩から「君はすごく頭のいい男だね」とほめられました。わたしには、なぜそうなのかと意味がわかりませんでした。「どうしてですか？」と聞くと、「君は楽譜を見ないで、全部暗譜してピアノを弾いた。すごい記憶力だということです。「私は譜面を見て弾けないのです。全部手の反射運動にしてしまったのです。ですから、暗闇でも弾けるのです。」と言ったら、今度は先輩がげげんな顔をしていました。

この一件から、子どもたちは音楽を大変好きになりました。私も調子に乗って音楽の時間をつぶしたりしませんでした（ただし伴奏は単音で）。

6年生になって卒業アルバムを作ることになり、4学級の学級がそれぞれ異なる教科の学習風景を1枚ずつ入れることになりました。わが学級はどの教科の学習風景を写真にするかと子どもたちに相談したところ、期せずしてみんなが「音楽」と言うのです。それで、私がグランドピアノをけっこうよく弾いている、そのまわりを50名の女の子どもたちが取り囲んで歌っている場面をアルバムにおさめてあるのです。教科の中で最も指導能力の低い、また知識・技能の劣る私にとって、このシーンは一生にただ1回のすばらしい場面となったのであります。

音楽の指導に優れた方から見たら、何と馬鹿らしいことか、何と気の毒なことかと思われるだろうし、自分ながら本当に恥ずかしい事件ですが、私のガムシャラな取り組み、ファイトが子どもたちにすごいインパクトを与えたことは確かだと思っています。

指導者が本気で事に当たらなかつたら、指導される者も本気にならないだろうと思います。子どもの学力向上も、指導者の熱意、ファイトが大きな要素になるものと確信しています。対象となる子どもたちの将来に幸せを築き上げるための能力の開発、学力の向上を心から願って渾身の努力をすることが期待されるのであります。

(4) 児童生徒の主体的・積極的な取り組みの態度の養成を重視する

勉強とか、学力向上とかは、ある面では親や教師の強制が大きく作用すると思います。しかし、児童・生徒の自覚、主体的・積極的な取り組みがなくては、目標は達成できないと思います。

次のエピソードは、親しい友人である東京都の指導主事の方から直接聞いた話です。

ある時の全国学力調査で、東京都の抽出校の6年生の1組がすばらしい成績をおさめたそうです。集計するに当たり、この1組だけがあまりにも成績がよすぎるので、調査の実施に何かミスがあったのではないかという疑いがでて、実情を調べることになりました。指導主事が担任の授業を参観したいということで訪問したそうです。老練の女性教師が担任で、「算数の授業は、私の最も不得意とするものなんです。」と言っていました。そして、「文章題の解き方」を指導するのを公開したのだそうです。

問題をみんなで読んで解き方を考える場面です。

その先生は「難しい問題だね。私はよくわからないわ。」と言うのです。すると、1人の男の子が前に出てきて、黒板に丸などの図を描きながら「こういう問題ではないか。」と説明するのです。先生も他の生徒もコトンと納得できないで首を横にふっています。すると今度は別の子どもが前に出てきて、線分図を描きながら問題の構造を説明します。聞いている子どもの中に「うん、わかった。」と言って首を縦にふる者が出てきます。先生も「なるほどね、私も少しわかってきたわ。」と言う。そうしたらさらにもう一人の子どもが前に出てきて、「数が大きいとわかりにくいから、この数を10や6とか簡単な数に置きかえて考えてみたらわかりやすいのではないか。」

と提案しました。そうしたら、先生も子どもたちも「なるほど、わかった。」と言うのです。ここまで話し合うと学級の全員がニコニコ顔になり、「わかった。わかった。」と言うのです。全員が一斉に立式に取りかかったのです。

先生は黒板で計算をするときも、「先生は時々間違ったりするから、みんな気をつけてね。すぐ注意してくださいね。」と言うのです。子どもたちは目をキラキラ輝かし、真剣に取り組んでいるのです。注意散漫な子ども等一人もいません。全員が積極的に集中して学習しているのです。このような学習活動を見て、その指導主事は「あの調査結果は当然のこと」と確信をしたというのです。

昔から児童生徒に勉強させるために、教師は「ほめる」、「叱る」、「通知表にひびくぞ」等とおどす、賞を与える、段階を定めて上へ進めるといった所謂「あめとむち」でがんばらせるようにしがちであります。このような方法を全部否定することはできませんが、学習の主体者である児童生徒の内からの希望・欲求・願いといったものに基づく目的意識・集中力の向上ということなしには、真の意味での学力向上は達成できないと思います。

このような「動機付け」(motivation)を上手に行うことが、学力向上対策を実施するに当たって極めて重要なことであると思うのです。「動機付け」の方法は、教科の内容、児童生徒の発達段階等によって異なると思いますし、教師の性格・人柄・能力等によっても大きく左右されるでしょう。前記の女性教師は、教師の指導力を意図的に強く押し出さないで、子どもの主体性をみごとに引き出したものと思います。しかし、このような方法が、いつでも、どこでも、誰もがうまく活用されるとは考えられません。要は、子どもたちが「勉強のおもしろさ」「自分でいろいろ工夫して実行することの楽しさ」「目的を達成したときの満足感や喜び」といったものを如何に感じ取らせ、主体的に取り組もうと努力するようにさせるか。これが指導のポイントであると思うのであります。

これに関連して思い出すことがあります。戦前の教育学部の附属小学校の教師は、ある1つの教科について特に深い指導力のある人で構成されていたようです。国語なら国語科の授業が特に優れており(他教科の指導は普通といった状態)、その面では全国的にも名が通っており、著書もあつたりするような人が選ばれていたように思います。

ところが、この人たちが仲間同士の茶飲み話に、「どうも、おれの得意教科の子どもの成績があまりよくないんでな。」と言っているのを聞いたことがあります。今になって思うのですが、その教科の内容について理解が深い分、子どもに対する要求水準が高く、「これも教えたい」「あのこともわからせたい」と教師主導で指導しようとするので、子どもの主体的な取り組みの姿勢の成立を阻害したのではないかと考えます。子どもと同じ目線に立って「一緒に考えよう」とか、「子どもたちの小さな発見にびっくりしたり喜んだりする」といったことで、「共に学び」「共に考える」、そし

て「子どもからたくさん学び取る」という姿勢が大切だとしみじみ思うのであります。

(5) 学力向上対策は、全県的な大きな課題とし、組織的なプロジェクトとしなければ成果は期待できない

富山県の学力向上対策を側聞したことがあります。全国学力調査の結果、成績のよくなかった問題をピックアップし、県の教育研究所がその原因・対策を研究して指導法改善案を立案する。これを指定校で検証し、「よし」となると、各地区ごとにこの説明会を開き、全県の各学校で、改善した指導法を実践するといった方策を採用しているとのことでした。なるほどと思ったのであります。ややもすると、他校と同じ方法で指導することやよい成果を挙げている学校や担任の真似をすることを潔しとしない傾向などあるようでは、とても広い範囲での成績向上は考えられないのであります。

最近、青森、秋田、山形県の学力が著しいのにびっくりしました。私の現役時代は、これらの東北各県はだいたい新潟県なみか、大変失礼ですが、新潟県よりは下位の方であったと思います。ところが、最近の調査結果を見て、その向上ぶりに驚いたのであります。また、最近、青森の山田高校の活躍ぶり（高校野球、駅伝、卓球などにおける活躍ぶり）、秋田の高校野球での活躍ぶり等、山形県の高校からの東北大学への合格数の増加等、何かあるなと感じていました。そのこと等に対応して、この度の全国学力検査の成績の向上。これらの県の意気込みが感じられるのであります。

今から20年くらい前、秋田県で私立の高校が新設されたとき、たしか県の副知事の方が校長になり、東大合格者を50人、高校野球で優勝できるまでに育てたいと豪語されているとの話を聞いた記憶があります。その構想の大きさにびっくりするとともに、すばらしいなと感嘆しました。

これらの県では、県全体として後進性の脱却のために児童生徒の学力向上のためのプロジェクトを展開したのではないかと想像しております。

このような大規模なプロジェクトは、一つの学校、一つの地区の研究機関の発想や努力では達成できません。したがって、われわれ個人がいくらがんばっても「螻蛄の斧」の誹りをまぬがれません。しかし、われわれが声を大きくして、本県の百年後の発展を視野に入れ、「米百俵」の精神を今こそ重視しなければならないと思っております。

本県の今後の発展のための児童生徒の学力・能力の向上策を県全体の規模で構築してがんばることが大切だと思うのであります。

2008・8・20 書き上げる